

原著

異文化受容における「情趣」の働き

日本人のキリスト教受容形態考察

檜内 久義

愛知みずほ大学瑞穂高等学校

日本人の異文化受容の特徴を生じさせる様々な要因のうち、「気風」、「気分」とも言える情趣の働きに注目し、それと文化形成における関係について考察する。対象は世界宗教であり、異文化の代表格でもあるキリスト教である。それが日本人によってどのように受容されたのかを、折口信夫と谷崎潤一郎という明治から昭和にかけて活躍した知識人の日本文化に関する見識を参考に考察する。

折口は古典の魅力について述べながらも、伝統文化が引き継がれる現象には情趣が関わっていることを指摘する。また、谷崎は日本人の気質と西洋人の気質との相違を述べた上で、キリスト教的精神が日本人に受け容れがたいものであることを指摘する。

キリスト教は日本文化において確固たる位置を占めているが、本来の信仰対象としては日本人の人口の1%に満たない信者を有するのみという状況である。確かにキリシタン時代の弾圧をはじめ、歴史的背景がキリスト教布教にとって好ましくないものであったという事実はあるが、日本人の宗教観がキリスト教の「神観」と馴染まないことが、その根本的な原因であると考えられる。それでは、日本人の宗教観とはどのようなものであるかを、日本人の宗教観を培った日本の風土について触れながら、キリスト教を独自の宗教観によって本来のものとは全く違うものに変容させてしまったカクレキリシタンと呼ばれる人々の信仰形態から考える。

はじめに

日本文化についての研究に取り組んでいる。現在のところ、宗教と異文化に対する日本人の対応の仕方についての考察を中心に研究を展開している。具体的には「日本文化としてのキリスト教」というテーマで、日本人にとってのキリスト教および、それによって垣間見られる日本人の宗教意識、異文化に対する態度についての研究に取り組んでいる。

これまでキリシタン時代のキリスト教受容、「カクレキリシタン」の信仰形態、現代社会におけるキリスト教の位置について論考を試みた。今回は、それらから得られた見解に明治20年代から昭和30年代まで活躍した知識人の日本文化についての見識を加えて日本文化について小考してみたい。明治20年代から昭和30年代までを採り上げる理由は、その時期が西洋文化の移入とともに近代以前の伝統的な日本文化が未だ日常生活の中で色褪

せずに見られたと考えられるからである。当時の知識人の見識として具体的には谷崎潤一郎と折口信夫の見識を採り上げ、本稿における考察の下敷きにする。日本文化について考えるにあたって両者から重要な示唆が得られることは言うまでもないが、今回敢えて注目する所以は、両者の文化事象に対する極めて繊細かつ感覚的な視点から齎される文化事象に対する深い洞察力に注目するからである。

文化形成と情趣

文化事象は突き詰めること人の営みである。人の営みである以上、それは文化を形成する集団を構成する個々人の個性に最終的には収斂される。但し、文化を形成する以上、個人間にある程度の共通認識が存在しなければならない。年中行事にしろ人生儀礼にしろ、広くは民族単位から狭きは地域、血縁集団、家族間の共通認識を土台として

執り行われる。それゆえ、最小のものとしては家庭から始まり、地区、地域、地方というような単位での調査が可能となる。対象範囲が拡大されればされるほど、文化の独自性が明確となると言えよう。関東、関西といった括り方を考えれば容易に理解され得るだろう。言語から始まって各種風俗に見られる相違は明らかであり、そこに気質または気風と呼ばれる住民たちの文化事象に関する認識の相違が確認される。更に民族または「国」

(国家)という単位で見れば、元旦の初日の出を心待ちに待つ人々の姿から元日を迎える心情及び日の出という現象に対する日本人の独特な共通認識というものの存在を疑うことは困難であろう。

文化を研究対象としている上で重要な視点として位置づけているものに「情趣」がある。文化を形成する要因としては様々なものが考えられよう。歴史的、地理的、政治的、経済的、心理的、それを眺める角度、捉え方によって様々な要因、視点を存在せしめることになる。しかし、それらの中で不可欠と考えられるものが心理的な要因である。言うまでもなく、「情趣」は、その心理的要因に含まれる。

文化を形成する様々な要因を、その地域性を中心として考えると、「風土」という用語が最も包括的な概念として採り上げられよう。「風土」は単に地理的なものではなく、他の多くの文化形成要因を含む上に、それらの要因から生じた更に細分化した要因をもが、言わば有機的に関係し合った文化形成の土壌として捉えられる環境である。日本のモンスーン気候を背景とした豊かで穏かな自然環境を例に挙げてみよう。四季の変化に富み、豊かな森林とそれらを育む河川、高峻な山地の景観と、恵まれた海洋資源、見渡す限り続く広大な平野等の自然環境が日本には存在する。そして、それを一次的要因として生じた生活様式、例えば稲作文化、それを二次的要因として生まれた衣・食・住を基に生まれた生活習俗、更に、それを要因として様々な文化事象が生まれるというような流れをもって日本の「風土」は形成される。例えば、日本の宗教事情として、しばしば指摘される日本において絶対的一神教が育ちにくい要因として、その自然環境を中心とした「風土」が挙げられるが、それは単なる自然環境ではなく、日本の地理的条件から派生した文化形成のあらゆる要因がお互いに関係し合った複雑な様相を呈している。

文化を形成する心理的な要因も、いくつもの要因が関係し合った「風土」と密接な関係を持っている。「情趣」は、その心理的要因の中で、ときに

生命に関わる根源的な感情、「憤怒」、「悲嘆」、「憎悪」、「狂喜」等の極めて激しい感情を指さない。また、その生じさせるのに明確な起因を必要としない。極めて曖昧であるが、捨てがたい感情とでも言えるべき性質の感覚を指す。何かしらの行動の動機を尋ねられたときに、「何となく」とか「何処となく」とでも表現できる心理状態である。例えば、マイカーを購入する際の状況を例に採ってみよう。車を購入する際には、様々な条件が関わってくる。まずは、経済的なもの。次に、それに見合う性能。そして何より好み。「情趣」という心理的要因は、この「好み」に分類される。経済的に魅力的で、それに十分すぎるほどの性能、他にも自然環境に優しい機能が備えられているとか、数年間、修理や部品交換の費用が無料であるとかの何かしらの特典がついている商品でも、最終的に色が気に入らなかったり、形に満足が行かなかったりする場合には購入を諦めるか、購入するにしても「妥協」という形をとる。販売員に購入しない理由を訪ねられた客は、「色が何となく違う」とか、「形が何処となく好みと異なる」というものではなからうか。もちろん、もう少し明確な理由を挙げるかも知れない。だが、その場合も、どのようであれば自分の好みにぴったりと合致するかを説明することは難しいのではないか。やはり、そこにも「何となく違う」というような感覚が残る。他にも、特に理由もないのに、買い物等に誘われた場合にも、「何となく気分が乗らないから」という理由が聞かれることも少なくないだろう。人が何らかの行動を起こす場合に、「気分」という表現されるような情趣的な動機は見逃せない。何故なら、そのような場合は日常生活において頻繁に見受けられるということもあるが、最も注目すべきは、妥協が許されないからである。いくら客観的に挙げられる明確な理由がいくつも存在しても、「気分」という主観的な理由ひとつによって妨げられたり、躊躇されたりといった行為は枚挙に暇がない。そこに文化形成、特に異文化受容における重要な要素があると考えられるからである。

折口と谷崎の見解

折口信夫は、「生活の古典」というものを述べるにあたって次のように記している。

明治中葉の「開化」の生活が後ずさりをして、今のあり様に落ちついたのには、訣がある。古典の魅力が、私どもの思想を単純化し、よなげて清新にすると同様、私どもの生活は、

功利の目的のついて廻らぬ、謂は仮^ゝむだと

も思はれる様式の、由来不明なる「為来り」^{しきた}によつて、純粹にせられる事が多い。其多くは、家庭生活を優雅にし、しなやかな力を与へる。門松を樹^たてた後の心持ちのやすらひを考へて見ればよい。日の丸の国旗を軒に出し

た時とは、心の底の「歎び」——^{シタエ}下笑ましと

とも言ふか——の度が違ふ。所謂「異教」の国人の私どもには、何の掛り合ひもないくりすますの宵の燈に胸の躍るを感じるのは、古風な生活の誘惑に過ぎまい。

くりすますの木も、さんた・くろうすも、実はやはり、昔の耶蘇教徒が異教の人々の「生

活の古典」のみやびやかさを見棄てる気になれないで、とり込んだものであつたのである。

(折口信夫『古代生活の研究 常世の国』
『新学社近代浪漫派文庫 24 折口信夫』新学社 2005 年 97・98 頁)

この引用箇所における折口の意図は、古からの

「由来不明」な「為来り」^{しきた}が現代（執筆当時の）生活の中で生活を優雅にするというところの「生活の古典」の存在そのものに焦点が当てられているが、ここでは、それにより齎された「やすらひ」や「くりすますの宵の燈に胸の躍る」という、その「胸の躍り」に注目したい。また、この箇所には、本稿で採り上げるキリスト教についての重要な他のテーマも含んでいるので、また後ほど触れたいと思う。

門松を立てた際の心持ちや、「くりすますの宵の燈に胸の躍る」気持ち、すなわち、「気分」は折口の言う通り、功利とは無関係のものである。折口は、別の箇所で、その気分を齎す「生活の古典」と名づけた古典の魅力は、ときには生活の倫理内容にまで及ぶと述べ、突き詰めて行くと、信仰にまで行き着くことを指摘しているが、そこまで追究せずとも（それはそれでまた興味深い指摘であるが）、門松を立てるという行為、また、クリスマスの風習に共感を覚えるという心情を抱くには明確な理由、目的は存在しないという点において文

化形成においては、「気分」と呼ばれる情趣が深く関わっていると言えよう。

さて、明治、昭和に活躍したもう一人の知識人である谷崎潤一郎は、言うまでもなく文学界における重鎮である。彼は作家として小説の他にも数多くの優れた随筆を残している。「陰翳礼賛」等は、その代表作であり、日本人の気風や美的感覚を見事に描出しており、それは日本文化を考える上では非常に参考となる作品である。彼は「懶惰の説」という随筆で次のように述べている。

たとえば基督教の運動に「救世軍」というものがある。私はその事業なりそれに携わる人々に対して敬意をこそ抱け、決して反感や悪意を蔵する者ではない。しかしその動機の如何にかかわらず、ああいう風に街頭に立って、激越な、早口な、性急な口調で説教したり、自由廃業の援助に奔走したり、貧民窟を軒並みに叩いて慰問品を贈ったり、一人々々行人の袂を捉えて慈善鍋への寄附をすすめビラを配るというような、せせこましい、瑣々屑々たる遣り方は、不幸にして甚だ東洋人の気風に合わない。それは理窟を超越した肌合いの問題であつて、東洋人にはお互いに解っているはずの心理である。ああいう運動を見せられると、われわれは足元から追い立てられるように忙しい気持がするばかりで、少し

もしんみりした同情心や信仰心が湧いて来ない。人はよく仏教徒の布教や救済の方法が、基督教に比べて退嬰的なのを攻めるけれども、実はあの方が終局において国民性に叶っているのである。

(谷崎潤一郎「懶惰の説」 篠田一士編『谷崎潤一郎随筆集』岩波文庫 2005 年 22・23 頁)

ここでは、キリスト教プロテスタントの一派である Salvation Army の支部が 1895 年（明治 28 年）に日本に設けられて以来行われていた「救世軍」の「社会鍋」または「慈善鍋」と呼ばれていた募金活動が採り上げられ、それに対する感想が述べられている。折口の場合には、キリスト教の風習は日本人の情趣に好ましいものとして採り上げられているが、この場合には「理窟を超越した肌合いの問題」としながら、「気風に合わない」ものとして記されている。

2004 年の夏（2004 年 6 月 9 日から 2004 年 8

月 31 日まで)に東海地方の 18 歳以上の住民に対して任意記名方式、選択、記入併用形式でキリスト教についての意識調査を行い、548 名から貴重な回答を得た。そこではキリスト教についてのいくつかのイメージを尋ねたが、そのイメージの中に、キリスト教の「正しさ」と「好感度」について尋ねたものがある。それらの項目について「正しくない」、「嫌いだ」と答えた回答者が挙げた理由に次のようなものがあった。

「子供をつれた物売りはよくない。」(「正しくない」の回答)・「訪問販売みたいに怪しく押しかけてくる人があるから。イラク戦争を始める原因にも思えるから。宗教戦争を起こしやすい宗教というイメージがあるから。」「イエス・キリスト自体には、好感度があるのですが、だいぶ昔に子供と一緒に連れて、各家庭をまわる布教活動を行っていたのに出合ったので、子供を使うことに抵抗を感じています。ルール違反だと思います。」(ともに「嫌いだ」の回答)

ここには救世軍の慈善鍋の活動は見られないが、布教のために各家庭を「子供をつれた物売り」や「訪問販売みたいに」「押しかけ」たりするという一部のキリスト教派の強引とも思われる積極的な布教活動が正しくない行為、または不快なものとして挙げられている。そこには、キリスト教徒の押し付けがましい布教方法が日本人(東洋人)には受け容れがたいという谷崎の指摘と重なるものがある。もちろん、谷崎の注目するところとアンケートの回答内容とはコンテキストが異なる。谷崎は、西洋人は極めて行動的であり、かつまた、そのことを善しとするが、東洋人は「物臭さ」、「億劫がり」という性質を特色として有しており、それを悪しとはしないという文脈においてキリスト教徒の布教方法を採用上げている。そして、アンケートの回答の場合には、訪問販売と思われる行為や子供を利用していると思われる行為が反発の中心である。しかし、それらに共通して見られるのは、やはり、キリスト教の布教方法が日本人の気風に合わず、受け容れがたいものであるということである。

以上、折口と谷口の日本人の気質についての見識を引用しながら文化形成、または異文化受容について、「気風」や「気分」とも呼べる情趣が見逃せないものであることについて見てきたが、文化の中でも、特に宗教、信仰という精神的分野においては、この情趣が重要な要因となる。次に信仰の問題について述べてみたい。

信仰の問題

信仰の問題は突き詰めれば、個人の問題である。普遍的なものではなく、極めて個人的と言えるものである。信教はあくまでも自由であり、信仰における帰着点は個人である。この場合の自由とは個人の権利が法的に認められ、保護されているといった性質を言うのではない。権利とは阻害される恐れがある場合に用いられるべき性質の言葉であり、信仰内容は本人に、それを変える意思が無い場合、たとえ外圧をかけられたとしても、それに左右されるものではない。たとえ何らかの圧力によって外面的な信仰の様式を変えたとしても、個人の内的信仰まで影響が及んでいるかについては量ることはできない。キリシタン探索のために施した古の絵踏みにおいても、キリシタンの行動が内的信仰を全て表出したものとは限らないのである。聖影に足掛ける信徒は棄教どころか、更に重い十字架を背負っていかなければならなくなる場合がある。彼においては、救いのために、かの宗教にすがりしかなくなる場合もある。朝日に手を合わせる者に、罷りならぬと禁止したとしても、曙に特別な思いを馳せる彼の心情を禁ずることができるだろうか。また、信仰は極めて個人的であるがゆえ、世界宗教といわれる類の宗教においても、その教義が信者すべてに同一に受け容れられているとも期待できない。もちろん、世界宗教の場合には、すでに、国の違い、民族の違いによる文化の相違から生じる変容を来たしていることが考えられるが、それに加えて個人レベルでの変容も待ち受けている。食材は同一でも、それぞれの消化能力によって吸収度に差が出るのにも似ていようか。学問や他の文化において、その立場や形態は多様であり、相対的であるが、信仰の問題についても、それは例外ではない。現代の学問は文化相対主義であるとも言える。これは、それぞれには、優れているところもあれば、そうでないところも当然存在するという考え方であり、絶対的なものはないという立場である。ゆえに、その優劣に関する基準については相対的、個人的なものである。

信仰の問題の場合、極めて個人的な問題であることについては既に述べたが、それでも、個人の枠を超えた、民族性、国民性による信仰形態、特徴が実際には存在する。この民族性、国民性による特性の存在は、見方を変えれば、当然、民族性、国民性によって固有の信仰形態があってもいいという考え方である。具体的に言えば、「聖書の理解の仕方はアングロサクソン人と日本人とは違って

いてもいい」(山折哲雄『日本の心、日本人の心下』日本放送出版協会 2004 年 22 頁)という考え方である。

人は社会的な生き物であり、複数の人から成る社会の枠の中で生活している。当然、社会は文化を生み出し、その文化は、その社会の枠の中では共通となる。この文化は人と人との結びつきが強いほどその社会の各構成員に及ぼす影響度は強くなる。例えば、小規模なコミュニティや単一民族による国家などでは生活様式をはじめとして文化は極めて似通ったものとなる。

価値観は、多様極まりなく、個人の数だけ存在するといっても過言ではないが、この価値観は人格が形成される社会背景と密接に繋がっている。すなわち、社会の様相が似通ったものであれば、かなりの共通性を持った価値観が形成されることになるのである。それゆえ、信仰のような極めて個人的な問題でも民族性、国民性といったものからは逃れ難く、そのような視点からの捉え方が可能となる。

代表的なカトリック作家である奥村一郎の著作、『祈り』に次のような一節がある。

小学校三年生のころだったと思う。家に神棚と仏壇があり、いつのまにか父母にならって、学校に出かけるまえ、ちょっと手を合わせて拝んでいく習慣がついていた。ある日のこと、父が「おまえ、何を祈ってるのか？」と尋ねた。とっさのことで、すぐにことばが浮かばなかったのか、「ウウン、ナンニモ……」と首をヨコに振りながら答えた。「そうか、それでいい」気の抜けたようなわたしの答えを意外に思う様子もなく、父はことばを足した。「神さまの前で、一日のうち何分かでいい。きれいな心で立ちさえすれば、それでいい」父はもうそのことを覚えていないようだが、わたしには不思議なほど鮮明に、もう四十年近くまえになる、その朝のことが思い出される。(奥村一郎『祈り』女子パウロ会 2004 年 188・189 頁)

信仰とは何か。様々に定義することが可能だろう。しかし、祈り無くしての信仰があり得るだろうか。キリスト教信者だけでなく、自らの信じる「神」を持つ人々はひょっとすると、奥村が指摘するような「きれいな心」で「神さま」に向かう心を忘れてしまっている場面があるのではないだろうか。私は、「きれいな心」、言い換えれば、謙

虚で純真なる心での祈り無くしては、その行為、心情は信仰ではあり得ないと考えている。

神学者をはじめとして、キリスト教関係者は、日本でキリスト教信者が一向に増えないことについて憂慮し、その原因を探ろうと様々な思考をめぐらして来た。私は、キリスト教に限らず、宗教という文化事象が、グローバル世界を迎え、相対的な価値観こそが重視される現代、特に、合理化と常に最新の科学技術でもって発展してきた日本においては、まず、大した価値は見出され得ないと考ええる。それは、宗教から、信仰、「祈り」が失われてしまったからではなかろうか。

現代は、上記で紹介した「祈り」に基づく信仰心が持ちにくい時代となってしまったのではないだろうか。宗教からは「祈り」を中心とした信仰が欠落し、それは、目的を達成するために、その教えや理論を利用する手段となってしまった部分が大きいのではないか。

そのような状況では、現代の日本においては宗教に絶対的な価値を見出すこと自体が難しいことをまず指摘しておくが、見方を変えてみると、「祈り」無くしては信仰心は持てず、宗教は見向きもされないものか、「宗教」とは名ばかりの信仰以外の目的が求められる形骸化された存在になってしまうということである。

キリスト教に対する反応

宗教に、祈り、信仰心という精神的な分野が欠かせないものであれば、そこには、やはり、「気分」や「気風」という言葉で表現される心の働き、すなわち、情趣が深く関わって来ることになる。その情趣は、個人的なものとは言え、既に繰り返して述べているように社会環境、特に「風土」と呼ばれる、人を囲むあらゆる要因が有機的に関係し合って形成された環境の影響を強く受ける。それゆえ、西洋人にとっては積極的、行動的なキリスト教の精神は好まれるが、ときに物臭さや億劫さまでもが善しとされる日本人には敬遠されるということも十分あり得るのである。

では、キリスト教は、日本人に全く受け容れられなかったのであろうか。答えは「否」である。現在、総人口の 1%に満たない数であるが、洗礼を受けた信者は存在している。また、数字という明らかな形では示せないが、例え受洗していなくても信仰している者も少なくはないだろう(最も、仏教をはじめ、「洗礼」というイニシエーションを伴わない宗教では、その信者数は明確には把握できないが)。ただ、信者の数が増えないのには、現

代の宗教離れを別にしても、キリスト教にとっては歴史的に不幸とも言える環境の中に殆どあると言ってもよい。それについては、本稿では詳しく述べられないが、簡単に紹介すると、キリシタン時代の禁教と迫害、戦争による迫害、明治以降の都市と印刷物を中心とした、偏った布教方法、閉塞的で現代の実情に合わない教会の在り方等である。それらは外的なものもあれば、教会そのものの問題もある。

また、キリスト教は宗教としてではなく、文化としては、日本人に大いに受け容れられている。折口の文章にも見られたが、「クリスマス」はもはや日本の年中行事のひとつとして定着し、日本文化において欠かせない存在になっているといっても過言ではない。それは、「くりすますの宵の燈に胸の躍る」という情趣的な面を除いても、経済効果等の面においても日本において重要な位置を占めている。

キリスト教の性質

ここで、折口の「生活の古典」の中に述べられていたキリスト教と異文化との関係について少し述べてみたい。それはキリスト教が日本をはじめ、非キリスト教圏の人々にどのように受け容れられたか、また、受け容れる側の非キリスト教圏の人々によってキリスト教自体がどのように変容するかを垣間見ることができるからである。

異文化が接触するときには様々な現象が起きるが、文化形成は極めてサイバネティックな現象であるため、その程度に差はあれ、異文化間に双方向性の作用が生じる。この相互作用を考えるには、宗教の問題であれば、グノーシス現象やシンクレティズム（宗教混交）、インカルチュレーションという様々な観点がある。なお、グノーシス現象については後で述べる。

折口は、古のキリスト教徒が、異教徒の伝統文化を、その「みやびさ」ゆえ捨て切れず、キリスト教文化の中に取り入れたと述べているが、見方を変えてみると、キリスト教が非キリスト教圏の人々の伝統文化を取り入れたとも解釈できる。後者の方が、世界宗教となるべく布教を拡大していく意図が存在するとすれば、むしろ、妥当性を持つかも知れない。実際、キリスト教教会には、布教先の文化を受け容れ、積極的に入り込んで行こうという動きもある。いずれにしても、キリスト教が布教を拡大していくにつれて、その姿が変化していく現象が見られることを表している。歴史的に見ても、それは確かであり、キリスト教精神

の基になる聖書自体も、諸文化の福音化を呼びかけている反面、そのメッセージがインカルチュレーションの実例であることが問題にされる場合もある。

すなわち、キリスト教は、仏教等と同様に、諸文化の影響を受け、その姿を変えつつ教圏を拡大していったのである。また、空間的な問題だけではなく、時間的な問題、すなわち、時代性にも、影響を受ける。特に現代では、それは著しい。それは、キリスト教の本質までもが揺るがされる程のものである。その背景にあるのは言うまでもなく科学技術の目覚ましい進歩である。もはや科学技術の進歩は神の領域であった生命創造の分野にまで及んでいるのである。

話が時代性にまで及んでしまったが、キリスト教は、決して不変な存在ではなく、異文化の影響、更には時代の影響を受け、変化する存在なのである。キリスト教は変わるべきではないという普遍性が求められる一方で、時代に合わすべきだという要望にも応えなくてはならない立場にある。それは、何も、現代だけに言えることではない。

カクレキリシタンの信仰生活

このように宗教としても、ひとつの文化としても日本において独自の位置を占めているキリスト教であるが、次に、それが日本人の「手にかかる」、すなわち、宣教師や西洋人の指導者抜きに日本人だけの手に委ねられると、どのような存在となるかについて考えてみたい。それは、日本人の情趣が異文化受容にどのように関わるかを検証するのに極めて適していると考えられるからである。

1644年（正保元年）に最後の宣教師である小西マンショが殉教してからキリシタンたちは宣教師による指導が受けられなくなった。そんなキリシタンたちは1873年（明治6年）に禁教が解かれるまでの約230年間は「潜伏キリシタン」として自分たち信徒たちだけで信仰生活を送らなければならなかった。その期間は全く日本人の手に信仰活動が委ねられることになったのである。それも教会の指導者抜きの状態であるので、その信仰生活は日本人の宗教意識、道徳観等の「素」なる日本人気質の影響をまともに受けることになったのである。

ある特殊な信仰形態を持つ一部の人々を指す「カクレキリシタン」という名称がある。「キリシタン」とか「カクレ」とあるので、あたかも禁教下の「潜伏キリシタン」や「隠れキリシタン」を指しているように思われるが、別のものである。

「カクレキリシタン」とは、その研究者である長崎純心大学教授である宮崎賢太郎氏が用い始めた名称である。それは、どのような人々を指すのか、宮崎氏本人の文章を用いて紹介する。

現在のカクレは、歴史的にはフランシスコ・ザビエルによって日本に伝えられたローマ・カトリックに由来するものであることは明らかであるが、二五〇年あまりにわたり江戸幕府の弾圧をこうむり、また明治以降一〇〇年以上の時を経て、カトリック的特質を消失し、きわめて日本的な民俗宗教のひとつに変容していることは言を俟たない。

こんにちカクレの呼称をめぐる少なからず混乱を招いているのは、江戸時代の、仏教や神道を隠れみのとするのでなければ生き延びていくことのできなかった人々と、一八七三年（明治六）に禁教令がとりさげられ、もはや隠れみのを必要とせず、公に信仰を明らかにすることが可能になったにもかかわらず、隠さなければ生きていけなかった時代の信仰形態を継承している人々を区別することなく、一般的に「隠れキリシタン」とよびならわしていることにある。両者は厳密に区別される必要がある。それは単に時代的な差異のみならず、本質的にそれらの信仰の間には大きな差異があり、「隠れキリシタン」という呼称でひとつにくくることがまったくもって実態とはかけはなれた、不適切なものである。

潜伏時代の隠さねば生きていけなかった江戸時代のキリシタンの信徒を、キリシタン史研究の創始者姉崎正治に従って「潜伏キリシタン」とよび、一八七三年以降の隠す必要がなくなったにもかかわらず、再渡来したカトリック教会に戻ることもなく、潜伏時代の信仰形態を基本的に取り続けている人々を「カクレキリシタン」とよびわけることを提唱したい。（宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』 東京大学出版会 1999 年 30・31 頁）

すなわち、「カクレキリシタン」とは、禁教令解除後の、信仰を「隠す必要がなくなったにもかかわらず、再渡来したカトリック教会に戻ることもなく、潜伏時代の信仰形態を基本的に取り続けている人々」を指す名称である。

宮崎氏は、それをキリスト教であるカトリックが変容した「日本的な民俗宗教のひとつ」とであると規定している。そして、その信仰の特色を4つ

の観点において指摘している。それらは、「重層信仰」、「祖先崇拜」、「現世利益主義」、「儀礼中心主義」であるが、全てについて紹介する余裕がないので、初めの2つについて紹介したい。

「重層信仰」は、弾圧の歴史的な事情により隠れ蓑としていた仏教、神道の要素が完全に信仰生活の一部となってしまった信仰形態を指している。例えば、カクレキリシタンが住む長崎県の生月の家庭では、玄関や台所に火の神様・竈の神様である荒神様を祀った祭壇があり、座敷には立派な神棚が祀られており、居間には位牌が並んだ仏壇がある。更に、昔は納戸と呼ばれていた奥まった日当たりの悪い部屋に、カクレの神様が祀られているし、最近では、お大師様やお不動様を祀る祭壇を設けている家庭があること、また、裏庭のお稲荷様を祀る祠、島に漂流して命を落とした身元不明者の霊を弔う「死霊様」と呼ばれる祠がある家庭も多いこと等を、その例として宮崎氏は挙げている。

「祖先崇拜」についてだが、これは日本の民俗宗教の宗教観の基層を形成するものであり、カクレキリシタンたちも例外ではなく、先祖に対して強い思いを抱き、殉教者となった身近な祖先を一種の聖人として祀り、その行いを可能な限り変更せずに維持していくという信仰形態を指す。例えば、カクレの人々が「御前様」と呼び、祀っている掛け軸があるが、そこにはキリストや、デウス、マリアというキリスト教的なモチーフの他に丁髷を結び、和服を着た人物で、その地区の中心的な指導者でさえ、その人物が誰なのか分からないというような人物像が描かれたものもある。恐らく、その地区の殉教者と思われるが、宮崎氏は、そのような明確に誰と認識されない人物像が、次第に先祖のイメージを持って祀られたとしても不思議はないとし、「目に見えない神よりも、身近に接した自分たちの血につながる殉教者（聖人）たちの言葉、行いを学び、それに対する崇敬を示すことの方が大切とされていったのである。」（『カクレキリシタンの信仰生活』 192 頁）と述べている。

他にも、本来のカトリックの祈祷とは全く異なり、意味すら不明な独自の「オラショ」（祈り）が存在し、それを継承し続けていることや、その内容に多神教を思わせる「神寄せ」と呼ばれるものが見られる等、カクレキリシタンの信仰形態は実に特異で、キリスト教を起源にはしているものの、宮崎氏の指摘する通り、キリスト教とは全く異なる民俗宗教のひとつと言えるものである。このように特殊な歴史的背景が存在したという理由もあ

るが、日本人の手に委ねられ、日本という「風土」では、普遍的とされ、世界宗教の代表とも言えるキリスト教でさえ、大きく変容されてしまうこともあるのである。このことは既に 1960 年代に遠藤周作によって『沈黙』の中で描かれてもいる。この変容を齎したものが、日本人独自の精神世界なのである。

「グノーシス主義」や「グノーシス現象」という用語がある。グノーシスとは、元来、「知識」を表す言葉であったが、異文化間の関係を表すために使用される用語である。イザヤ・ベンダサンと山本七平氏のグノーシス主義、グノーシス現象についての解釈を基にカクレキリシタンの存在について少し考えてみたい。

山本氏はひとつの伝統的文化が他文化に接したとき起こるほぼ共通した型の現象のことを「グノーシス現象」と呼び、次のように述べている。

グノーシス主義は、キリスト教史において「異端」の代名詞に使われるほど強く排撃されたが、さて、世界史においてキリシタンと最もよく似たものを探していくと、実はグノーシス主義なのである。ではグノーシス現象とは何か。グノーシスとは元来は「知識」「認識」の意味で、この場合は、自己の伝統的な思想を「輸入の思想・宗教」に仮託して客体化し、それによって「知識」として再認識しなおす現象、ともいえよう。そしてこういう現象を起こすという点では、もちろん、日本人も例外ではない。例外といえる点があるならば、通常この現象は最終的には相互作用となり、例えば、キリシタン思想が遂にローマ・カトリック自体に強い影響を与え始めるという形になっていくので、異端として排撃され、激烈な闘争を起こすという経過をたどるわけだが、日本教は常にこの現象を起こさないという点である。（I・ベンダサン『日本教徒』文藝春秋 1997 年 34 頁）

山本氏はキリシタンをも本来のキリスト教ではなくグノーシス現象を起こした別の宗教として捉えている。そのことから見れば、カクレキリシタンはまさにキリスト教とは全く別物の宗教と言える。それは「異端」ともなり得なかった。なぜならキリスト教に何らかの影響を齎す存在ではなかったからである。

以上、カクレキリシタンを対象として、異文化を独自のものとして変容してしまう日本人の異文

化受容形態と、その基底にある日本人の情趣について考えて来たが、カクレキリシタンの信仰形態の「重層主義」にも見られた日本人の多神教的「神観」を生み出す背景となった日本の地理的風土についても触れておく。

日本の風土と宗教観

国際日本文化センター所長の山折哲雄氏は、イスラエルを旅して、エルサレムに入ったときの印象を、それは、まるで砂漠のなかの廃墟のような趣であったと述べた上で、そこは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という世界の三大一神教の聖地であると紹介した上で次のように述べている。

なぜ三つもの厳格な一神教の聖地が、よりによってこの狭い地域にひしめいているのでしょうか。その答えは、風土にあります。イスラエルではどこに行ってもどこを眺めても、荒涼たる砂漠しか目に入ってきません。この地上に頼るべきものは一つもない、ということが実感として迫ってくるのです。とすれば、唯一の絶対的な価値はどこに求めればいいのか。最終的には、天上のはるか彼方に求める以外にないのです。一神教の成立する背景は、まさにこの砂漠にあるということを、私は理屈においてではなく、実感したのです。

そんな体験をしてイスラエルから帰国し、日本列島の風土にふれたとき、私は本当にほっとしました。あの安堵感は、ちょっと言葉にならないくらいです。地上には山々がなだらかな稜線を見せている。そこに緑したたる樹木が生い茂っている。豊かな海がある。きれいな川が流れている。魚が泳いでいる。草木は四季それぞれに花を咲かせ、葉を茂らせる。そんな日本列島が、私には極楽にも浄土にも見えました。

このような風土のなかに住んでいた昔の日本列島人は、荒涼たる砂漠に住む民とはちがって、何も絶対的な価値の源泉を天空のかたに求める必要はありませんでした。地上そのものが仏の住む世界であり、神の住む世界であり、人間の住む世界であり、そしてご先祖様が息づいている世界だったからです。これが、まさに万葉人が生き、そして信仰していた世界です。今も山川草木に豊かさと安らぎをおぼえるわれわれの感覚は、日本の風土が万葉の時代から千数百年たっても基本的にはそう変わってはいないこと、そして、そこに

われわれの精神的な核があるということを、示しています。(山折哲雄『日本の心、日本人の心』日本放送出版協会 2003 年 10・11 頁)

「山川草木」の日本の風土は、豊かな恵みを日本列島に住む人々に与え続けて来た。豊かな恵みを与えてくれる森や川、山は、全て感謝の対象となる。また、そこには絶望がない。そこに生きる人々は、この世に絶望感を抱かなかった。それに対して、「荒涼たる砂漠」の風土では、そこに住む人々は、この世に絶望感しか抱けなかつた。彼らは、救済を求めるが、現実の世の中は絶望の世界でしかないのを、それを、はるか天上に求めた。自分の生きる時代に救われなかつたならば、次の世代には救われることを、また、その世代に救われなかつたなら、また、次の世代に救われることを祈ったのである。その祈りは切実であつた。それに比べて、豊かな風土に暮らす「日本列島人」は、この世の恵みに感謝するばかりであつた。彼らの祈りは、感謝の祈りであり、砂漠の民の絶望感に満ちた現実からの救済を祈るというような切実なものではなかつたのであろう。

また、山川草木に囲まれた風土では、恵みを与えてくれる「神」は、森に、川に、山に住んでいた。更に、そこには、やがて、「仏」も住むようになったが、それら、「神」や「仏」が住む世界は、先祖が暮らしていた世界でもある。そして、今、自分たちが暮らしている世界でもある。日本風土を基底とする、そのような生活を通して生まれた「神観」は、「唯一」という概念ではなかつた。豊かな風土には、諸処に「神」が存在した。そして、自分たちを産み、養ってくれた先祖たちは、「神」と同じ世界に存在したことにより、神格化されることにもなる。豊かな自然も、先祖たちも、「神」となり得るという「神観」が、古の日本人の心の中に知らず知らずのうちに育まれ、それが、現在の日本人に特に意識されない形、まるで、遺伝子に刷り込まれたような形で受け継がれて来たのではない。

山折氏の指摘する日本の風土が日本人に絶対的唯一の神を求めさせなかつたのかも知れない。また、万葉の時代から現代に至るまで基本的に変わっていない日本の風土に培われた日本人の情趣は、その「神観」や宗教観だけでなく、日本のあらゆる文化形成において影響の大小はあるにしても関わりを持つことは避けられない。

おわりに(文化研究の姿勢)

G・ペイトソンは、文化の特性を「〇〇的」などの項目(カテゴリー・タイプ)に分類できると思うのは誤りであり、個々の文化特性が単一の機能を持つという考え方からは「文化というものは、いくつかの『制度』に細分できる、そして一つの制度をつくる特性群の主要な機能はみな同等だ」という考えに陥るのは避けがたいと指摘する(G・ペイトソン・佐藤良明訳『精神の生態学』2000年新思索社「文化接触と分裂生成」120・121頁)。そして更に、文化特性を「経済的」・「宗教的」・「構造的」などの項目に割りふってすますことはできない。ひとつの特性が、いずれかの観点から眺めれば、そのものになり、どのような文化的特性であっても、それが提供され、受容され、拒絶される現象には、いくつもの原因が一度にはたらいっていると考えるべきであると述べる。彼は、「〇〇的」・「△△的」というカテゴリーは文化そのものに実在するのではなく、文化を言葉で記述するために、研究者が考案した抽象概念であり、それらは文化のなかに現象として存在するのではなく、研究者が文化を観察する様々な覗き窓につけた名前である。したがって、抽象概念を操作するときは何よりも「具象性の誤認」(ホワイトヘッド)に陥らないようにすることが肝要であると指摘する。確かに示唆に富んだ指摘ではあるが、冒頭でも述べたように、あらゆる文化事象は突き詰めれば人の営みであり、学問ですら例外ではない以上、研究者の観念が研究を進めるにあたって介入することは避けられず、また、それこそが人の営みたる文化について考えるに必要不可欠な視点となるのではない。もちろん、具象性を見誤らないことの重要性は言うまでもない。

以上、折口信夫や谷崎潤一郎が指摘する日本人の情趣を引用し、その異文化受容における影響力を中心に日本文化についての小考を試みた。終わりにあたって文化研究についての私見を述べさせていただいたが、今後も、風土や情趣が深く関わる「人の営み」として文化研究に取り組んで行きたいと思う。最後に論者の見識の浅さと紙面の都合で十分な考察ができなかつたことをお詫びし、本稿を閉じたいと思う。

参考文献

折口信夫著『新学社近代浪漫派文庫 24 折口信夫』新学社 2005 年
篠田一士編『谷崎潤一郎随筆集』岩波文庫 2005 年

原著

遠藤周作著『沈黙』新潮社 2004 年

I・ベンダサン著『日本教徒』文藝春秋 1997 年

宮崎賢太郎著『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学
出版会 1999 年

奥村一郎著『祈り』女子パウロ会 2004 年

山折哲雄著『日本の心、日本人の心 上』・『日本の心、
日本人の心 下』日本放送出版協会 2003 年・2004 年

G・ペイトソン著 佐藤良明訳『精神の生態学』新思索
社 2000 年